

# 明治の日本人は 志を胸に秘めていた

「世界一の親日国」として語られることの多い台湾。そんな台湾において、最も愛されている日本人が、戦前の土木技術者・八田與一だ。「八田さんは、今も私たちの胸の中に生き続けています」。その死から七十五年が経つ今なお、台湾人はそう語り、慕ってやまない。八田の何が、彼らをそこまで惹きつけているのだろうか。

Watanabe Toshio

## 渡辺利夫

PROFILE 昭和十四年（一九三九）、山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学総長などを歴任。日本李登輝友の会会長も務める。著書に「新脱亜論（文春新書）」「アジアを救った近代日本史講義（PHP新書）」など多数。

●拓殖大学顧問

## 台湾で慕われ続けている男

日本では語られる機会が少ない一方、世界で尊敬を集めている日本人——。歴史をひも解くと、そんな人物が少なくないことが分かります。

例えば、江戸時代、視力を失いながらも国学者として大成した堀保己一は、アメリカの社会福祉活動家ヘレン・ケラーが人生の目標にした人物として知られています。第二次世界大戦下で多くのユダヤ人を救った外交官・杉原千畝も、日本でその存在が注目され始めたのは近年のことでしょう。

そして、「世界一の親日国」ともいえる台湾で、最も愛されている人物が、戦前に活躍した土木技術者・八田與一です。

八田は明治の終わりから昭和の初めにかけて、まだ発展途上にあつた台湾の地で都市整備や農業水利事業に尽力しました。中でも、十年にわたる大工事の末につくった烏山頭ダムは当時東洋一の規模を誇り、完成された灌漑システム「嘉南大圳」は、水不足に苦しんでいた台湾南西部の人々を救いました。それだけではありません。隅々まで水が行きわたつた十五万ヘクタールの嘉南平野は、豊かな穀倉地帯へと生まれ変わりました。その結果、台湾は農産物で稼いだ外貨で工業化を成し遂げて、これが第二次世界大戦後の「奇跡」とも称される経済成長に繋がるのです。

すべては嘉南大圳の完成から始まつたといつても過言ではありません。李登輝元総統はその偉業に触れて、八田を「台湾の大恩人」と称しています。しかし——。多くの日本人は八田の功績はおろか、その名前すら知らないというのが現実でしょう。

八田がいかに台湾で慕われているかを物語る挿話は、枚挙に暇がありません。台湾の国民中学の教科書では八田が取り上げられています。また毎年五月八日の八田の命日には、何百人もの地元参加者によって、慰霊祭が行なわれています。その中でも、特に印象的なのが彼の銅像を巡る話です。

烏山頭ダムが完成したのは、一九三〇年（昭和五年）のことです。その翌年、地元の人々の手によってつくられたのが、八田の銅像でし



た。存命中の人物の銅像がつけられること自体が珍しいですが、太平洋戦争後、台湾が中国国民党の蔣介石時代に入ると、日本人の銅像はほとんどが撤去されてしまいます。しかし、烏山頭ダムが造られた嘉南地方の人々は、政府に逮捕されることも辞さない覚悟で、八田の銅像を隠しました。

「八田さんは、私たちに大変な恩恵をもたらしたとしても守り抜こう」

戻されました。今も地元の人々によって絶えず花が供えられています。すし、多くの台湾の観光客が訪れています。それにしても、八田はなぜ、嘉南大圳という未曾有のプロジェクトに挑み、完遂することができたのでしょうか。それを知るためには、八田の胸の裡にあった「真心」に目を向ける必要があります。

### 台湾統治にあたった明治人の思い

台湾に対しては、多くの日本人がポジティブなイメージを抱いているのではないのでしょうか。今でも台湾を訪れば、老若男女を問わず誰もが日本人に親切に接してくれますし、年配者の中には日本語を上手に話す方も少なくありません。

「世界一の親日国」ともいわれる所以ですが、その背景には、一九〇五年(明治二十八年)から五十年にわたる日本統治時代が背景にあります。

「統治」というと、どうしても、植民地からの利益搾取に終始したと思われがちです。事実、帝国主義が吹き荒れる十九世紀後半から二十世紀前半、欧米列強は相当に荒々しい圧政を世界各地で敷いていました。

しかし、明治の日本人は異なりました。彼らは、「自分たちは、真つ当な海外領土の経営をしよう」という気概を強く持つていました。オランダやフランスは、植民地に対して自国の文化を押し付けたあげく、被統治国の発展などにはまるで目を向けず、略奪政策に走りました。一方の日本はというと、第四代台湾総督・児玉源太郎と民

た方だ。な

彼らは、八田の恩に報いようとしたのです。やがて国民党の圧政の時代が去り、八田の銅像は元の位置である烏山頭ダムのほとりに

ったそうです。社会的弱者に対する強い共感こそが広井の工学の基礎にあり、八田はそんな広井から、地球のどこだろうが、目の前で苦しむ人々のために献身すべきだ。

と学んだことでしょう。

また、八田の兄弟子にあたる青山はパナマ運河建設に携わった唯一の日本人ですが、信濃川大河津分水路改修工事を完成させた際、竣工記念碑に、次のように刻んでいます。

「人類ノ為メ國ノ為メ」

先ほど紹介した明治人の志は、まさしくこの青山の簡明な言葉と重なります。いかにも広井の門下生らしい強靱なグローバルリズムとナショナルリズムです。こうした広井や青山の思想こそが、八田を八田たらしめていったことでしょう。

明治四十三年(一九一〇)、東京帝大を卒業するや直ちに八田が向かったのが、台湾でした。児玉や後藤の尽力で近代化の道を歩み始めていたものの、未だに未開の地域が多く、八田が開発を任せられた台南地方もその一つでした。

八田は発想のスケールの大きさから「大風呂敷の八田」と周囲に称されていましたが、その技術と仕事ぶりは誰もが評価するところでした。だからこそ、台南開発という難事業を任せられたのです。ただし、嘉南大圳の計画は規模も予算もとにかく規格外で、上司の山形要助からは「これはとんでもないプロジェクトだ」と言われました。それでも八田が、「できます、やらせてください」と訴えると、山形は八

### 強靱なグローバルリズムとナショナルリズム

政長官・後藤新平のもと、台湾の文化を尊重しつつ、物資輸送のための鉄道や港湾の整備、上下水道整備による衛生状態の改善など、台湾の近代化のために様々な政策を施行しました。児玉や後藤ら明治人の胸の裡にあったものは、「台湾とともに近代化を目指す」との一念に他なりません。当時、台湾は諸外国に「化外の地」と称された未開の島でしたが、そこに住まう人々の暮らしを日本と同等に引き上げる。彼らは、そんな純粋な思いを抱いていました。そして同時に、台湾が近代化を遂げて工業や農業が発展すれば、将来は日本を助ける存在になり得るとも考えました。

台湾統治にあたった明治人の志は、この言葉に集約されます。そして、これを体現した象徴的な人物こそ八田與一なのです。

八田が石川県金沢に生まれたのは、明治十九年(一八八六)、日清戦争の約十年前のことです。青年時代、いくつもの得難い出会いに恵まれた八田ですが、私がとりわけ紹介したいのが、東京帝国大学工科大学土木工学科の専任教授・広井勇と、八田の先輩で同じく広井に学んだ青山士です。

熱心なクリスチャンだった広井は、青年時代のある日、「この貧乏国にあつて、民に食べ物を与えずに宗教を教えるも益は少ない。僕は今から工学の道に入る」と、友人であった内村鑑三に告げ、宗教については沈黙の人にな

田に計画を一任しました。私はここに、当時の日本人の懐の深さを感ぜずにはいられません。八田は当時、三十四歳。いわば中堅の一技師に、あれほどの大事業を任せましたので、優秀な人材が埋没しがちな現代とは比べるべくもありません。

八田の熱意が山形を衝き動かしたのもありましょう。八田は計画時、烏山頭ダムを造る嘉南地方を視察しているのですが、ある時、農家に立ち寄って、水をくれるよう頼みました。すると返ってきたのは、「井戸はあるけれども、今は乾季なので、水はありません。四、五時間待ってくれば、汲んできましょう」。嘉南の農民は、作物用の水はおろか、飲料水の確保にさえ苦しんでいたのです。八田はその窮状を目の当たりにし、驚きとともに、決意を固めました。

「何ということだ……。必ずや、嘉南平野に水を送らなければならぬ。それが、工学者としての自分の使命だ」

そして、このことがゆくゆくは日本を助けることを、八田は十分に理解していました。日露戦争後の当時の日本は慢性的な米不足に陥っていました。嘉南平野を潤し、台湾の米生産量を増大させれば、これも解消できる。八田はそう考えて、嘉南大圳という難事業に挑んでいくのです。

## 海を越えて、時を越えて

工事の詳細は別稿に譲りますが、八田は文字通り不眠不休で働いたのです。当時はマラリアやコレラ、アメーバ赤痢などが蔓延し、また匪賊も完全に排除されたわけではなく、危険と隣合わせの任務で

する農法を採用しました。これにより、嘉南平野に暮らす農民は、等しく水を手に入れることができたのです。

八田にすれば、農民ごとに与える恩恵に差が生じることは、到底許せなかったでしょう。こうした八田一流の平等思想は、他の逸話からも窺えます。八田は工事で命を落とした従業員のために慰霊碑を建てましたが、日本人と台湾の人々を分け隔てなく、殉じた順に名前を刻んでいます。心情的には、日本人従業員の名前を先に挙げそうなものです。当時においては、なかなかできることではありませんでした。

そんな八田の姿を見ていたからこそ、台湾の人々は裕福でもない暮らしの中、皆が金を出し合って八田の銅像をつくり、また、その後、

した。しかし十年の歳月を経て、烏山頭ダムと嘉南大圳は見事な完成を見せました。

嘉南平野には網の目のような給排水路が張り巡らされましたが、総延長一万六千キロは地球半周に近い長さで、日本最大の愛知用水の約十四倍です。また、完成から八十年以上が経った今も、現役として台南の人々の暮らしを支えているのも驚くべきことです。

さらにもう一つ着目すべきが、八田が導入した「三年輪作給水法」です。嘉南平野は十五万ヘクタールの大平野ですが、実際にダムと濁水溪、二つの水源からの給水で灌漑できる面積は、七万ヘクタール程度と計算されました。そこで八田は、嘉南平野をいくつ

かのブロックに分け、一年ごとに給水区域を変えて、ブロックごとに一年目に稲作、二年目にサトウキビ、三年目に野菜などを栽培

命の危険を顧みずに守り続けたのでしよう。そして、八田の死から七十五年を経た今もなお、その遺徳が語り継がれているのです。八田の「真心」は、海も時も越えて、台湾人の胸に確かに届いています。とはいえ、八田與一という男が特別な日本人かといえ、私はそうは思いません。彼の師である広井や青山は言わずもがな、冒頭で挙げた杉原千畝や、韓国の戦災孤児を育てたことから現地で「三十八度線のマリア」と呼ばれた望月カズなど、ひたすらに、目の前の人々を救うために立ち上がった日本人は、八田だけではないのです。

むしろ残念なのは、彼らのような先人の存在と、その潑刺とした志を、現在の日本人が記憶から消してしまっていることではないでしょうか。八田のことを、今も大切に思い続けている台湾の人々の姿から、我々

\* \* \*

今朝、新聞(二〇一七年四月十七日付)を開いて我が目を疑いました。何と烏山頭ダムのほとりに据えられている八田與一像の首が、心無い者によって切断され、持ち去られたというのです。悪辣極まりない行為ですが、こんなことで、台湾の方々の八田の偉大な貢献に対する姿勢が揺らぐはずもありません(編集部注/ダムを管理する嘉南農田水利会の楊明風理事長は、「台湾の八田技師への評価が変わることはない」と述べている)。彼らの八田への愛情は、こういう事件によって強まりこそすれ、弱まることなど決してありえないと、私は信じています。



「八田與一肖像画」(伊東哲画、写真提供:金沢ふるさと偉人館)



今も毎年5月8日には、八田與一の慰霊祭が台南で執り行なわれている。(写真提供:日本李登輝友の会)